論文審査の結果の要旨

氏名　　大越　美香

本論文は、序章終章を含め８章からなり、序章では研究の背景目的・調査対象地・調査研究方法について述べている。

第１章では、調査対象とした茨城県「潮来地域」と「鉾田地域」の２地域について、文献調査ならびに土地利用調査を通じて自然環境と社会環境の変遷について分析考察を行っている。その結果、潮来地域の水辺を中心とした自然環境の変化の要因には、洪水防止の公共事業である護岸工事、川の干拓、ベッドタウンの建設による人口増加と農薬や化学肥料による水質の悪化が深く関与していることを、鉾田地域では、１９６０年以降、森林の資源的価値が低下すると、手入れが放棄され林床にアズマネザサが生い茂り、松枯れが増大するなど森林景観が変化はしたが、その変化は急激でなく数多くの谷津田なども残り里山が残存していることを明らかにしている。

第２章では、児童の聞き取り調査で得られた遊び、動植物の利用を、被験者の生誕年を５年ごとに区切って整理し、１章で明らかにした自然環境社会環境の変化と合わせて考察を加えている。その結果、魚介類の捕獲に関する遊びが水辺地域に、植物の採集と昆虫の捕獲に関する遊びが里山に多くみられ、自然空間と結びつきの強さが明らかにされ、さらに遊びは生活と密着しており、生活文化などの社会環境や子どもの興味の変化とも関係しているこ

とを明らかにしている。

第３章では、自然体験と動植物の存在認識との関係の分析を行っている。まず、児童による聞き取り調査結果から、遊びの体験を世代ごとに魚介類、鳥類、植物類、昆虫類、小中型動物に分けて整理し、認識された動植物の遊び体験の有無、利用の有無、認識要因を明らかにしている。さらにカタログ調査を実施した結果から、魚介は食体験と捕獲体験が最も認識と関係しており、鳥類は大型の水鳥が視覚的体験、小型の鳥が捕獲体験や聴覚的体験と関係していること、小中型動物は出会いという視覚的体験、昆虫は捕獲体験、植物は採集体験と食体験と関係していることを明らかにしている。

第４章では、遊びと空間認識について分析を行っている。児童による聞き取り調査から林、草地、水辺空間ごとに遊びの特徴を把握し、カタログ調査から遊びの対象となった動植物の生息空間を明らかにしている。その結果、遊びの対象となる植物や昆虫の生息空間が詳細に認識されていること、魚介は漁法や水への接触などを通して間接的に空間認識されていることを明らかにしている。

第５章では、自然体験と季節認識について分析を進めている。児童による聞き取り調査から得られた遊びを季節ごとに整理し、カタログ調査から季節の認識を把握して両者の関連性を考察している。その結果、遊びの中での季節性は、植物と昆虫それ自体が季節の象徴となっていること、特に花は、他の動植物の採集時期の指標となっていることを明らかにしている。それに対して魚介と季節性の関係は顕著でないことを示している。

第６章では、児童による聞き取り調査そのものの環境教育的評価を行っている。本研究の特徴である児童が両親祖父母に従前の自然環境と遊びについて聞き取るというアンケート調査によって世代間交流を行う環境教育的効果、さらにその結果を参考にした学習プログラムを作成して児童に直接自然との接触体験、認識経験を尋ねる方法によって、学習プログラムそのものの効果について検討している。その結果、児童は聞き取り調査を行うことによって、地域の基本的情報を獲得し、自然環境に興味を持つことが明らかになる一方、自然の理解や認識に繋げるには事前学習だけでなく体験学習が必要なことを明らかにしている。

終章では、研究の結果をまとめ結論を整理している。

以上、本論文は、子どもが両親祖父母にアンケートするという独自で信頼性の高い調査方法によって、自然環境認識の解明を試みており、オリジナリティが高く評価できる。さらに現地調査ならびにカタログ調査を実施して、遊びと空間認識、自然体験と季節認識との関係を明らかにしている。また、環境教育的見地から学習プログラムの検討も試みている。その内容および結果は、自然環境学分野における学術的価値が高く評価できる。また、環境教育分野への応用にも十分貢献するものと考えられる。したがって、博士（環境学）の学位を授与できると認める。